ぼくも手をつっこんだ。
　でも、どこまでが空気で、どこからが川なのか、わからない。空気と水のさかい目が、水面が、見えないんだ。
「底の方は、ぐっとつめたいね。いちばん底は、ふつうの水じゃない？」
　でも、水から手をぬいたら、手はかわいていた。水ぜんぶが、かげろう水になっているんだ。
　パパが、むねをはって深呼吸している。
「うまれかわったみたいに、いい気分だな。朝ご飯を食べてないのに、お腹もすかない」
「うん、気持ちいいね」
　ぼくも、パパといっしょに、深呼吸した。
「ぺぺっ、なんだこれ！」
　息をすったら、口の中に小魚が入ってきて、ぬけた前歯のすきまから、ぴちぴちとまた出て行った。
　あっはっはと、パパが笑った。
「そうか、川や海のプランクトンをすいこんでるから、お腹がすかないんだ」
「プランクトン？」
「ああ、この空気を顕微鏡で見たら、ミジンコやカニの赤ちゃんが見えるさ」
　家に帰ったら、ママはテレビにくぎづけだった。事件があると、いつもこうだ。
　事件のことは、ママに聞け。
「ママ、かげろう水は、いつまで続くの？」
「夕方になればもとにもどるって。地球のうらがわでは、もう、もどりはじめているの」
　なんだ、残念だな。
　ぼくは、かげろう水でもっと遊びたくて、また外に出た。
　道路や空き地に、子どもがいっぱいいた。遊んだことのない子もいた。
　なんだか体がむずむずして、ぼくたちは一日中、きゃっきゃっとじゃれあって遊んだ。
　かげろう水を泳いだり、ばくてんや、ばくちゅうをした。どの子もみんなできたんだ。
　サッカーボールをけったら、よらよらと動いて、ちっとも飛ばない。
　ボールを手わたしたほうが早いから、サッカーがラグビーになった。
　テレビゲームをしないで、こんなに外であそんだのは、もしかしてはじめてだ。
　夕方になると、鳥たちは、いつもの高さを飛ぶようになった。
　もう、魚は空中を泳いでいない。
　なごりおしそうにパパが言った。
「カイト、川のかげろう水は濃かったから、まだあるかもしれない。川に行ってみよう」
　ぼくたちはまた、川にでかけた。
　まだ、空気と水のさかいめは見えなかった。
「もうすぐ、水面が見えるようになるのかな」
　ぼくとパパは、川をみつめた。魚たちは、川の中を気持ちよさそうに泳いでいる。
　西の空が赤くそまってきた。大きなお日さまが、山のかげにしずんでいった。
　まだ、空は明るい。
　ぼくたちは、じっと水を見つめた。
　川のまんなかに、細い線がひかれたように見えた。そしてそこから、すううっと、水面がひろがっていった。
「パパ、かげろう水が消えたね」
「ああ、消えたな」
　なんだか、さみしかった。
　川の水は、まだすきとおっている。
　川のまわりに、空き缶やペットボトルが落ちていた。
　パパが、足もとの空き缶をひろった。
「きれいな川に、ゴミは似合わないな。にごっているときには、気にならなかったのに」
「かげろう水が消えたから、またドブ川にもどるのかな。このままでいてほしいよね」
　ぼくもペットボトルをひろった。
　そのとき、目の前で、ゆらゆらと動きだしたものがあった。

　虫？　何匹もいる。
　夕暮れの空を、上になったり下になったり。
　まるでおどっているみたい。すきとおった羽。みずみずしく緑がかった細い体。体より長い二本の尾。
　童話に出てくる妖精みたいだ。
　パパが、目をみはった。
「カゲロウだ。きれいな川にしかいない種類だ。この川に、こんなカゲロウがいるなんて」
「この虫、かげろう水の、われものじゃないの？」
　ぼくは笑って、パパを見上げた。